

大学院生に期待すること

大学院専攻長 中村 美砂

開学初年度ということもあり、学生も教職員もいろいろなことを手探り状態で進めたあつという間の1年間でした。大学院生は、毎週水曜日に9時の講義から始まり、特別研究については指導教員と夜遅くまで話し合いました。その他オンデマンドの講義や土曜開講講義も受講しました。また、医学英語特論では、日本語の科学論文を英語でプレゼンテーションを行うといった、これまで経験したことのないことも経験しました。9月には研究計画発表会が終了し、研究倫理委員会での承認も終わり、現在は全員が研究やデータ解析を行っている状況です。

共通科目と支持科目では、理学療法士の院生と言語聴覚士の院生と一緒に講義を受けました。学部でも基礎科目などは、理学療法専攻、作業療法専攻、言語聴覚専攻の学生が同じ教室で講義を受けたり、教室外でも3専攻間での交流があったり、職場でも各療法士間での交わりもあろうかと思えます。しかし卒業して臨床経験を積んだ今、異なる領域の人とのサイエンスを挟んだ交流というのは学部や職場でのものとは、異なるのではないのでしょうか。ぜひ、たくさんの交流を持って領域横断的な思考力を養っていただきたいと思えます。

研究を進める中で、ある院生は、研究対象となる地域在住の高齢者が運動機能、認知機能などいろいろな点で患者さんと大きく違うことを痛感した様子でした。また科学論文では、一見するととても簡単に実験を行ったかのようにとてもスマートに書かれていますが、実際の実験研究は、多くの時間を要し、制約も多く、忍耐のいるものであることを体得してくれたのではないかと思います。その忍耐の先にある「真実」、またはリハビリテーション領域でよく耳にする「エビデンス」を得ることができた時の大きな喜びも味わって下さい。

入学した院生は、それぞれに今の生活をどう感じているのだろうかと思ふ時がございます。大変でしょうが、研究を楽しむ心を忘れないで、充実した2年間にしていきたいと切に思えます。そして臨床において患者さんや同僚にその成果を十分に還元されることを期待します。

来年度はいよいよ修士論文の完成です。研究発表会でどんな結果が発表されるのかと今から楽しみにしています。

